

陽和病院の年間入院数と入院期間の変化について

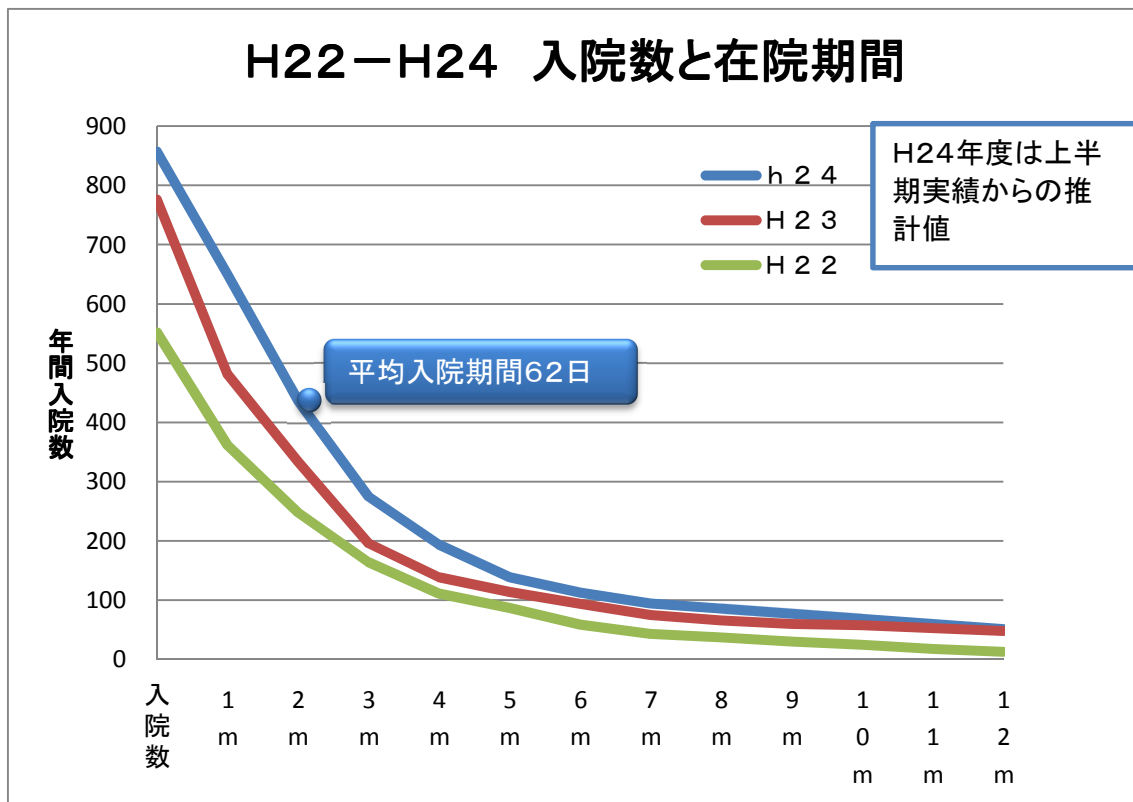
長期在院者（1年以上入院者）の地域移行について

医療法人社団一陽会 陽和病院

陽和病院の年間入院数と入院期間の変化について

陽和病院では、平成23年に新北棟が竣工し、精神科救急病棟・急性期病棟が稼働し始め、また東病棟を改修し認知症病棟としての運用も始まった。

それに連動して医療活動も活発化し、下図のように、年間入院数が急激に増加してきた。



H22年度から24年度の間、年間入院数は300人ほど増加している。その平均在院期間も少しずつ短縮してきており、H24年度は62日となっている。

一方、入院から1年を過ぎてしまう患者様も6%ほどいる。

1年以上の残存率は全国平均で約12%なので、その半分という水準だが新たな長期在院者を生み出している現状もあることは否めない。

入院が長期化しやすい患者像は、高齢で身体合併症を有している方や、帰来先が無かったり、家族背景が複雑だったりと様々である。

医療機関としては、地域の社会資源を創設したり、開拓したりして地域移行を推進しているところである。

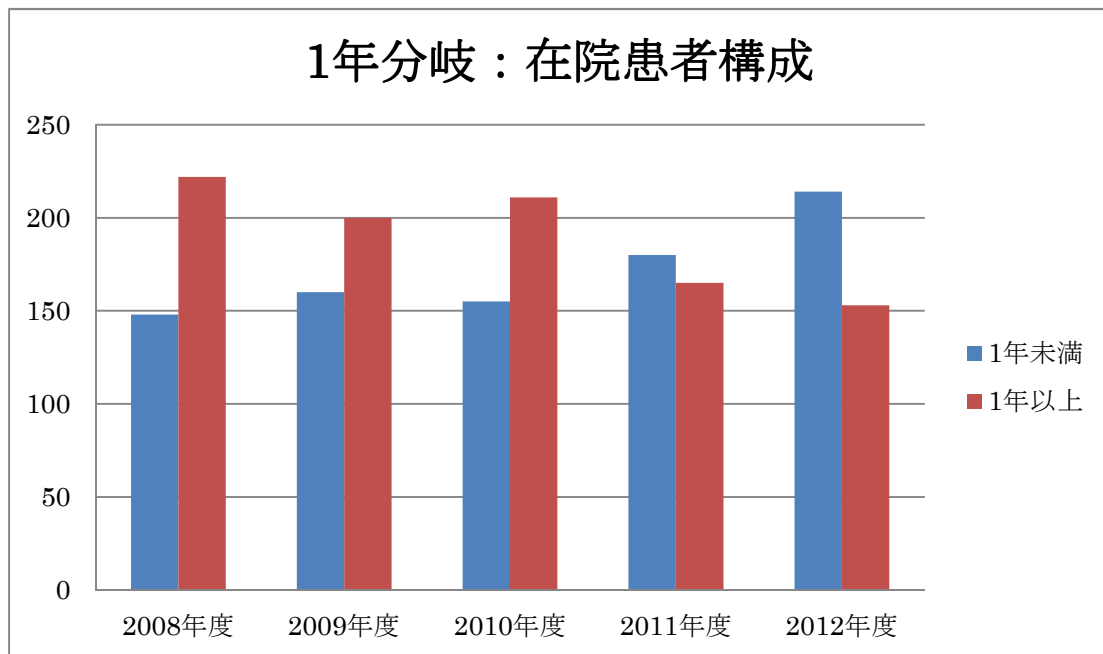
長期在院者（1年以上入院者）の地域移行について

日本では平成22年現在、約30万人の患者が入院生活を送っている。

その3分の2にあたる、20万人が1年以上の長期入院者である。

この中で毎年約10%にあたる2万人が地域移行しているが、新たに1年を超える患者もほぼ同数いるため、なかなか「長期在院問題」は解決していかないのが現状である。

下図は陽和病院におけるこの5年間の「1年分岐別患者構成」の経年変化である。



この5年間で、1年以上の長期在院者が70人以上減少している。

一方、1年未満の患者が60人ほど増加している。

2012年度（H24年度）は、1年分岐の患者構成比は7：5となった。

この間、病院としてグループホームの増設や、ワンルームマンションの開拓、様々な社会復帰施設との繋がり、介護保険分野の開拓などを精力的に行い、地域移行に勤めてきた成果といえる。